BRITISH COUNCIL

ブリティッシュ・カウンシル主催
大学教職員対象

第 10 回英国大学視察訪問報告書

2019 年 2 月 25 日（月）ー 28 日（木）

UNIVERSITY OF BRISTOL
DE MONTFORT UNIVERSITY
UNIVERSITY OF NOTTINGHAM
COVENTRY UNIVERSITY

www.britishcouncil.jp/programmes/higher-education

目次

1.	はじめに	3
2.	University of Bristol	5
3.	De Montfort University	12
4.	University of Nottingham	19
6.	Coventry University	30
7.	巻末資料（第 10 回英国大学視察訪問参加者リスト）	36

はじめに

英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、日本の大学で国際企画、国際交流を始め様々な部署でご活躍の教職員の方々を対象に、英国の高等教育システムおよび大学の国際化に関する諸施策への理解を深めて頂くことを狙いとして、2019 年 2 月 25 日から 28 日までの日程で、「第 10 回英国大学視察訪問」を実施致しました。

プログラムには、8 大学 1 機関から 10 名にご参加頂きました。訪問先は、全学部において世界をけん引する研究を行っており、日本と数多くの教育・研究交流を推進しているブリストル大学、2013 年から実施している国際戦略で英国最大規模の海外留学プログラムにより著しい成果を上げたデモントフォート大学、世界が直面する 6 つの地球規模課題を研究の優先課題とする全学的な取り組み Beacons of Excellence を推進し、マレーシアや中国に海外キャンパスを有するノッティンガム大学、近代に設立された大学の中でもトップに数えられ、約 170 億円以上を研究専門スタッフと研究設備に投入するなど、大規模な研究戦略を推進しているコベントリー大学の 4 大学です。

イングランド南西部から中部まで、教育システム、歴史、規模などの点で特色が異なる 4 大学での視察を通して、各大学の国際戦略、留学生獲得戦略と留学生支援、学生の海外派遣の取り組み、研究戦略などについて、各大学のユニークな取り組みを比較対照しながら理解を深めることができました。また、現地の学生によるキャンパスツアーでは、特色あるキャンパス内の施設や学生のキャンパスライフを垣間見る機会もあったほか、訪問先の国際部職員、日本と関わりのある教職員とのネットワーキングの機会や、参加者による大学紹介のプレゼンテーション発表の時間も設けられました。

以下、本視察訪問の参加者全員にご執筆のご協力を頂き、視察訪問報告書を作成しました。参加者の皆様が視察訪問をとおして得られた情報や知識、ご感想を広く共有させて頂き、日本の大学のあらゆる部署において日々、留学生や協定校関連の業務に取り組まれている方々のご参考となりましたら幸いです。

ブリティッシュ・カウンシル
教育推進・連携部

本報告書は、参加者の方々にご執筆頂き、ブリティッシュ·カウンシルが全体のとりまとめを行った上で作成したものです。参加者の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。報告書内、「所感」につきましては、執筆者である参加者の皆様のご意見であり、ブリティッシュ・カウンシルの公式見解ではありません。また 5 頁以降、参加者、報告担当者のご氏名は、所属機関名アルファベット順、敬称略で記載しております。どうぞご了承下さい。

本文中、2019 年 2 月時点において 1 英ポンドは 144 日本円となります。

英国大学視察訪問　訪問大学一覧

訪問日	場所	訪問先
2 月 25 日（月）	A	University of Bristol
2 月 26 日（火）	B	De Montfort University
2 月 27 日（水）	C	University of Nottingham
2 月 28 日（木）	D	Coventry University

UNIVERSITY OF BRISTOL 25 FEBRUARY 2019

1. 大学の概略

1876 年に設立されたブリストル大学は、国立の研究重点大学で、ラッセルグループの構成校である。英国で最初に女性の入学を認めた大学であり、ウィンストン ・チャーチル元首相が 30 年以上に渡り学長を務めた大学でもある。学生数は約 26,000 名、留学生は 120 ヶ国以上から約 5,100 名が在籍している。QS 世界大学ランクキング 2019 では 51 位にランクインしており、これまでに 13 名のノーベル賞受賞者を輩出している。全学部において世界をけん引する研究を行っており、特に大学の強みとする 7 分野において専門の研究所を有している。2016 年に策定した大学戦略では、6 つの柱「教育と学生生活、研究・イノベーション・パートナーシップ、教職員と働き方、国際化と国際関係、インフラ、サステナビリティ」を設定し、精力的に取り組んでいる。日本の大学との学術交流、またトヨタや東芝との産学連携にも積極的である。

2. 訪問スケジュール

時間	内容
10.15-11.15	留学生のリクルートメントと海外パートナーのマネジメント International Recruitment & Overseas Partners Management Charlie Pybus, Head of International Recruitment and Deputy Director International Beverley Orr-Ewing, Head of Global Opportunities and Deputy Director International Michael Benson, International Partnerships Manager
11.15-11.45	歓迎の挨拶 Pro-Vice Chancellor Welcome Dr Erik Lithander, Pro Vice-Chancellor Global Engagement) and Vice-President
11.45-12.30	ブリストル大学の国際戦略とレピュテーション University International Strategy & Reputation Alicia O'Grady, Director External Relations Caroline Baylon, Director International
12.30-13.30	昼食およびネットワーキング Networking lunch with University of Bristol colleagues
13.30 -15.00	キャンパスツアー Campus Tour
15.00-15.30	国際研究連携とパートナーシップ International Research Collaboration & Partnerships Dr Tiernan Williams, Senior Research Development Manager (International) and Acting Co-Head of Research Development Patricia Holley, Institute Manager, Jean Golding Institute
15.30-16.00	学生同窓会ネットワーク Alumni Network Joanna Sochacka, Engagement Manager, Development and Alumni Relations Office

3. 発表要旨

留学生のリクルートメントと海外パートナーのマネジメント

International Recruitment & Overseas Partners Management

Charlie Pybus, Deputy Director International and Head of International Recruitment

まず、留学生リクルートメント（International Student Recruitment）部署についての紹介があった。主となる業務は留学生に対する募集活動であり、留学フェアへの参加はもちろんのこと、良質な学生のリクルートのため、国内外のインターナショナルスクールの校長とも連携している。また、国際部を越えて、各学部や教員レベルで学生獲得に尽力しており、海外オフィスとも連携して行っている。特に中国、パキスタン、インド、マレーシア、UAE、メキシコ、EU において、海外オフィスを中心として重点的に活動している。

2019－20 年度の学生募集戦略としては、応募者に対するサービスの改善（特に出願手続きの迅速化と効率化、募集ラウンドの追加や質問受付の 24 時間化など）、英国内に基盤を持つインターナショナルスクールを開拓することで学部生獲得を強化し、また博士課程学生獲得のターゲットを五か国、インド・タイ・ナイジェリア・サウジアラビア等に絞り、深く国内事情を知ることも含めて強化することなどを掲げている。

実際、ブリストル大学に入学した留学生に対するケアとして、住居の世話（国内学生と同じ寮などに住まわせる他、適宜サポートを提供）や、多様化するインターナショナルな学生の支援（宗教・民族・ジェンダーの多様性への配慮、スペースや機会の提供と整備）、様々な宗教のための礼拝所（Chaplaincy）や、学生ビザ手続きのサポートも担当している。

Beverley Orr-Ewing, Head of Global Opportunities and Deputy Director International

次に、交換留学や海外協定校との関係、学生の派遣と受け入れ、サマースクールと短期プログラムについて説明があった。ブリストル大学は、36 か国以上、163 の交換留学協定校を持ち、その内の 100 がエラスムス・プラスのものであるが、現在の Brexit の状況では 3 月末に離脱になった場合、エラスムス・プラスに参加することができないため、大きな問題に直面している。このような状況になったとしても、ブリストル大学としては、ヨーロッパの交換留学協定校とは強固なパートナーシップ関係を築いているため、この関係性は今後も継続して発展していくだろうし、学生は継続してヨーロッパに留学し、逆にヨーロッパの学生はブリストル大学に留学するだろう、との見解だった。

36 か国で協定を結んでいる。アメリカやヨーロッパが主要ではあるが、アジアに関心が寄せられており、特に、シンガポール、香港、日本、中国について学生の関心が高まっている。この地域については、今後 3 年から 5 年にかけて、交換留学プログラムが大きく伸びていく市場であるだろうと予想している。

21%の学生が短期留学やインターンシップ、サマースクールなど、1 学期か 1 年間の海外留学を経験している。また、短期留学プログラムの一つとして、より広く学生が参加できることを目的とした「Bristol interns in China」プログラムを実施している。このプログラムは、財政的に厳しい状況にある学生などに対して中国への留学機会を提供し、奨学金を提供している。様々な種類の奨学金も提供している。さらに、インターンシップは現地の同窓会組織と連携し、強化を図っている。

他方、留学生を呼び込む Inbound の面では、単位互換、授業料免除（1 学期もしくは 1 年）などを行っている。特にサマースクールでは、将来獣医学を学ぶことを希望する高校レベルの留学生向けに「Destination Vet Summer School」を開講しており、また 3 週間の学部生向けのサマースクールの 2 種類を開講している。

Michael Benson, International Partnerships Manager

最後に海外パートナーとの国際協力推進についての説明があり、特にリクルート面での協力について話をうかがった。ブリストル大学では、研究、リクルートメント、モビリティ（流動性）、産業界、ネットワークに関するパートナーシップ活動が行われている。

リクルートメントにおけるパートナーシップには 2 つのタイプがある。1 つ目は、Articulation（学生をパートナーとなる大学で学位取得条件の一部分を終わらせ、ブリストル大学で当該学位の上級レベルを学ばせ、学位を取得させる）であり、2 つ目は、Progression（パートナーとなる大学で完全に学位を取らせ、その学位がブリストル大学における当該学位に一致したものとする）である。このタイプのパートナーシップは英国では一般的である。

具体的なプロセスとしては、まず国際部と研究者・学部レベルで優先事項を合意する「Scoping」から始まり、次に質保障（Quality Assurance）に従って学部レベルでの形を定める「Development」、その後パートナーとの合意を得て詳細な運用計画を定める「Approval」、学生リクルート・応募・選考作業に移り「Recruitment and Selection」、実際に学生が到着し、受け入れに伴う学生サポートを行う「Student Support」となる。毎年、パートナーシップに関するレビューが行われる。

Developing recruiting Partners

現在 43 のパートナーシップが全 6 学部において活発に展開しているが、主に Science and Engineering の分野で、東アジア、東南アジアにおけるパートナーシップ構築を促進している。2023 年までに毎年 500 人の学生を獲得する目標を掲げている。

パートナーの評価基準としては、まずはリクルートの点では、大学学生の多様性に寄与するか、パートナー大学の学生が学業面で成功を収めているかどうか。次にパートナーが、その国内でのブリストル大学の評価を高めるのに有益か、世間の注目を集めることができるか、最後に（そして最も重要なことに）既存・将来的な研究面での協力が見込めるか、を重視している。

歓迎の挨拶

Pro-Vice Chancellor Welcome
Dr Erik Lithander, Pro Vice-Chancellor Global Engagement) and Vice-President

歓迎の言葉とブリストル大学紹介動画を鑑賞後、日英の大学が抱える共通の課題として、人口学的問題（超高齢化社会にどう対処するか）、学生数が少なくなる中でどのようにして質の高い学生を確保していくか、収入のための学生数増加とそれに伴う相対的な質の低下が懸念されるため、ブランドと評価の維持をどう両立させるか、またグローバル化が進む中で留学生と現地学生とのバランスをどう考えるか、などの問題が提起された。

さらに間近に迫った英国のブレグジットについても触れられた。現在やや不透明な状況だが、ブレグジットは決して国際化を否定するものではないと解釈しうること、また EU 外の国々とのパートナーシップや関係強化を進めることで、より国際化を高めることができるのではないかということが述べられた。

興味深いことに、ブリストル大学は国際的な活動に精力的に取り組んでいるが、一方で地元の環境にも注力している。小さな街ではあるが、非常に安全で国際的な社会であるブリストルは、我々にとって一つの強みである。ヨーロッパの中でも数多くのフェスティバルを開催しており、学生にとってもキャンパス内の勉学だけでなく、地域でも様々な体験ができるという強みがある、とのことだった。

ブリストル大学の国際戦略とレピュテーション

University International Strategy & Reputation

Alicia O'Grady, Director External Relations

はじめにブリストル大学の国際戦略の概要について説明があった。現在の戦略は、2016 年に策定された以後 7 年間にわたる戦略で、次の 6 つの柱で構成される。

1. 教育と学生生活
2. 研究・イノベーション・パートナーシップ
3. 教職員と働き方
4. 国際化と国際的な繋がり
5. デジタルを含むインフラ整備
6. サステナビリティ

これらの戦略を実現するため、様々な取り組みを行っている。それぞれの取り組みは全てが関連しているため、一つの取り組みが複数の効果をもたらすと考えている。データの収集および分析が非常に重要で、それらが日々の活動や意思決定に活かされている。優秀な学生やスタッフを引き付けるためには、マーケティングや広告は欠かせない。ターゲット地域において多様なメディアを用い広告を運用している。

ブランド戦略は地域、政府、世界を意識している。ブランドイメージ向上のため、「（教育・研究等の）質の高さ」、「英国文化と学生生活」、「場所」、「馴染みやすさ」をキーワードに活動している。伝統的な教育・研究レベルの高さを維持しつつも、それだけに満足せず、学生の雇用可能性を高めるため、同窓会組織を活用してより良い就職先を見つける等に努めている。また、ブリストルは歴史的な建造物や美しいキャンパスがあるだけでなく、英国におけるデジタル産業の中心地である。ブリストルという街の、そのような特徴も大学のブランドレピュテーションのために利用している。

Caroline Baylon, Director International

大学の国際化のための取り組みは多種多様であるが、大学の戦略実現のため以下の観点を通じ、優先的な取り組みを決定している。レピュテーション対策と同様、これらもそれぞれ独立したものではなくそれぞれ関連している。

1. 質の高い学生を集めるため、世界の留学生から選ばれる大学であること
2. 学生に国際的な経験をさせること（多文化主義政策の推進）
3. レピュテーションを上げるため国際連携すること
4. ブリストル大学が研究だけでなく、教育でも非常に高いクオリティを有すると、評判をさらに高める

国際研究連携とパートナーシップ

International Research Collaboration & Partnerships
Dr Tiernan Williams, Senior Research Development Manager (International) and Acting Co-Head of Research Development
Patricia Holley, Institute Manager, Jean Golding Institute

1. 組織の紹介

はじめに、国際研究連携を担当する組織の研究と事業発展（Research and Enterprise Development）における活動について紹介があった。9 チームから成る部署で、国際研究開発、政策立案、契約、研究管理、プロジェクト運営、企業支援等がある。今回紹介する国際研究開発チームは、UK 外との共同研究の支援を行うのが業務である。研究者が研究資金を獲得のするための支援を行っている。支援内容は国内外のファンド（例：HORIZON2020、Global Challenges Research Fund (GCRF)、Worldwide Universities Network (WUN) 等）の情報を収集し、学内限定サイトで公開している。また、申請方法のサポート、ファンド、パートナーとの連絡窓口を引き受けている。さらに、リサーチプロポーザル作成のサポート（校正、プレゼンのフィードバック、面接、サイトビジットのアレンジ）も行っている。
2. なぜ国際共同研究が必要なのか？

ブリストル大学は、世界的な研究重点大学の一つとして認められており、この位置を保持したいと考えている。ブリストル大学が 2017 年に策定した戦略でも、「大胆かつ積極的な国際ポジショニング戦略を通じ、レピュテーションを維持・強化すること」が定められている。

英国と日本の共同研究には歴史があり、日本において英国は 4 番目に多い共同研究相手国である。また、ブリストル大学は、2013 年から 2017 年の間に日本の研究者と 600 以上の共著論文を発表しており、研究者同士の強固な繋がりを維持している。例えば、原子力分野は互いの専門家やリソースを補完する関係である。

3. どのように国際共同研究を行うのか

大学の研究機関同士、専門研究機関（特にブリストル大学の強みと考えている分野）同士などの交流があるが、主となるのは研究者個人同士の繋がりである。

日本との研究連携では、企業では豊田中央研究所、東芝通信研究所、Honda Future Automotive Technologies が挙げられる。また、大学とは、東京大学、京都大学、東北大学と連携している。

京都大学とは、2008 年および 2011 年に MOU を締結した。ワークショップやシンポジウムの活動を行っており、共著論文が 100%増加（2013-2017）しており、被引用インパクトの増加（2017 年に 22, 2015 年に 16）が主な成果である。現在も交流は活発で、今春にも 10 人の研究者を京都大学から受け入れる予定。ブリストル大学からも京都大学に訪問の予定がある。

京都大学との連携で学んだことは、連携には時間がかかること。研究サポートチーム同士の繋がりが重要であること、またトップの関わりの可視化およびその仕組みが必要であるということだ。ほとんどの協働の成功の要因は、ボトムアップによるもの。大規模研究のサポートの提供について資金提供者に働きかけ、英国にもっと来てもらう仕組みが必要。アカデミックイヤーの違いは学生交流の足かせとなっており、更なる努力が必要である。

4. 国際共同研究のためのブリストル大学独自の基金は 3 種類

International Strategic Fund, Benjamin Meaker Visiting Professorships, Global Challenges Research Fund (GCRF)

5. 国際共同研究のための外部資金

UK Research and Innovation Network が 6 種類用意。大規模研究への対応や英国への研究者受け入れに掛るスキームが不足している。

UKRI - JSPS Joint Call では、対象分野は Life Sciences、Environmental Sciences で、10 件のプロジェクトに合計 700 万ポンドを配分している。

学生同窓会ネットワーク

Alumni Network
Joanna Sochacka, Engagement Manager, Development and Alumni Relations Office

ブリストル大学同窓会は国内外に 15 万人の同窓会会員（25 パーセントが英国、EU 外の会員）を持ち、200 近くの国に会員がいる。この同窓会活動を担当するブリストル大学側組織は主に 3 つのチーム、Fund raising team、Data team、Management Team（寄附は求めないが、キープさせることを目的としたチーム）から成り立っている。電子媒体や SNS を通じての情報提供・連絡はもちろんだが、郵便で情報を送付している。地域として特に北米、そして中国、マレーシア、シンガポール、香港、インド、タイ、スリランカを重視している。

同窓会の活動にとって重要なのは、いかに OB や OG と継続して繋がることができるかだ。その際に問われることは、何のために同窓会があるのか？所属して何か利点はあるのか？ということで、ノスタルジア・伝統・名誉・記憶が会員にとって重要であることをまず認識しなくてはならず、加えて、研究と知的関心を刺激、満たし続ける必要がある。さらに、つながり続ける利点として専門家とのつながり、機会、ネットワークを同窓会が提供できることを強調されていた。具体的なインセンティブとして、JStor のような電子ジャーナルアクセス権を会員に提供していることや、歴史ある大学の建造物で行われるイベントなども紹介された。

同窓会運営組織が国内外の同窓会会員へ提供できるものとして、特別かつ専門的な人脈（特にキャリアや経験が上の人々との接点）の提供やネットワークの機会、最新の研究との接点、文化イベントへに参加できること。さらに、このグローバルなネットワークがブリストル大学にもたらせるものとして、キャリアのアドバイスや海外コミュニティの拡大と、その海外ネットワークを現地のコネクションに結び付けることと、大学ブランドのアンバサダーとしての宣伝、が挙げられた。

キャンパスツアー

説明の様子

講堂（卒業式、同窓会などを開催）

セミナーハウス（一般の民家を買い取り教室として利用）

Pro-Vice Chancellor, Global Engagement, Vice-President

キャンパス内

インドアスポーツセンター

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

日本の大学も今後ますます宗教、民族、ジェンダー面での多様化が進むことは確実であるが、その歴史的経緯ゆえに早くからこの状況に直面してきた英国の大学が、さらに多様性を推し進め、彼らを大学・研究生活に統合するだけでなく、大学の研究・評価、ひいては社会にとってプラスとなるように努力している点はぜひ見習うべき点であると感じた。

加えて、国外から応募してくる学生の申請・選考プロセスの簡素化・効率化や問い合わせへの対応時間の柔軟な対応、ターゲットとなる国の分析やコミットの深さなども、学生の選別の問題が伴うとはいえ、積極的に国外学生を獲得する上で参考になるのではないかという印象を持った。

研究者への国際共同研究のための資金獲得サポート体制が手厚いと感じた。研究者への情報の提供や申請方法のサポートはもちろん、ファンドやパートナーとの連絡窓口の引き受け、リサーチプロポーザル作成サポート（校正、プレゼンのフィードバック、面接、サイトビジットのアレンジ等）を行っているという。サポートそれ自体はユニークではないが、組織としての研究者サポートをここまで充実させている日本の大学は多くないのではないか。参考にしたい取り組みである。

5. 報告者所感

全般的な印象として、明確な方針と組織編成を基盤とした明確な戦略をもって海外学生獲得、パートナーとの協力、研究者サポート、レピュテーションの維持、向上、同窓生との関係維持や強化に臨んでいる姿が発表から感じ取られた。英国ブランドと英語、英国の歴史的遺産を十分に活用した（特に北米・東南アジア・南アジア・東アジアにおいて）戦略はそのまま日本に応用することは難しいもしれないが、徹底した市場の絞り込みと開拓は強い印象を残した。

他方で同窓会組織の運営については、そこまで革新的なアイデアはないようであったが、大学が有するネットワークやブランド、研究上の資産といった内容面にやはり大きく左右されるものであり、それがあってこそ国際的な場での活動に組み込めることを再確認した。

（報告担当：巽、岡部）

DE MONTFORT UNIVERSITY
26 FEBRUARY 2019

1. 大学の概略

De Montfort University (DMU)は、1870 年創立、イングランド中部、レスターに位置する国立大学。学生数は、22,000 人以上、留学生は 130 ヶ国以上から 2,700 名以上を有する国際色豊かな環境が特徴的である。2013 年以降、在籍する学生の全員に海外留学の機会と、そのための資金援助を提供する、英国の大学で最大規模の海外留学プログラム #DMU global を実施。2018 年の 1 月には 11,000 人目の学生を海外留学へ送り出した。その優れた国際戦略により、2016 年と 2018 年の 2 度にわたり、Times Higher Education 社のリーダーシップ・マネジメント部門の優秀国際戦略賞を受賞している。新たに 1 億 3 千 6 百万ポンド（約 196 億円）を投資してアート・デザイン設備を含むキャンパスの改築を行っており、日本の大学とのパートナーシップ構築にも積極 的である。

評価されている研究分野：English Language and Literature, History, Music, Drama, Dance and Performing Arts, Communication, Cultural and Media Studies, Library and Information Management

2. 訪問スケジュール

時間	内容
11.00-11.15	歓迎のご挨拶・国際戦略の開発と実施に関する紹介 Welcome and introduction to the development and implementation of corporate international strategy Dan Winney, Area Manager (East Asia), International Office
11.15-11.30	パブリック・エンゲージメント担当者による「DMU のグローバル・エンゲージメント」 DMU Global Engagement Mark Charlton, Associate Director of Public Engagement
11.30-12.00	留学生リクルートメントとサポートについて Recruitment and support for International Students Dan Winney, Area Manager (East Asia), International Office Andy Gale, International Student Support Officer, Student Services
12.00-12.30	#DMU global について #DMU global – Leading the way for outward mobility Leo Smith, Head of #DMU global
12.30-13.00	国際的な研究連携・協定について International Research collaboration and partnership Professor Deborah Cartmell, Associate Pro Vice-Chancellor Research
13.00-14.00	親睦会ランチ Networking Lunch
14.00-14.30	海外協定校との開発・マネージメントについて Development and management of overseas partners Adam Percival, Progression Co-ordinator, International Office Duncan Hepworth, Partnerships Development Manager, Global Partnerships Unit
14.30-15.00	学部紹介（ビジネス・法律、芸術・デザイン、コンピューター、工学・メディア ヘルスサイエンス）、親睦会

	Introduction to the faculties (Business & Law, Arts & Design, Computing, Engineering & Media, Health & Life Sciences) and networking opportunity (Associate Deans International)
15.00-16.30	キャンパスツアー Campus Tour
16.30-17.00	同窓会組織について DMU Alumni networks Ty Watson, Head of Alumni
17.00-17.30	学生、スタッフにおける平等性、ダイバーシティ、インクルージョンの向上と確立について Initiative to ensure/improve equality, diversity and inclusion among students and staff Antonia Jackson, Senior Equality, Diversity and Inclusion Advisor

3. 発表要旨

ご挨拶、国際戦略の開発と実施に関するご紹介

Welcome and introduction to the development and implementation of corporate international strategy
Dan Winney, Area Manager (East Asia), International Office

1870 年に Art school として設立され、現在は 22,000 名を超える学生が在学している。大学の国際化に非常に力を注いでいる。留学生の受け入れを積極的に実施しており、130 ヶ国以上から約 2,700 名の留学生を受け入れている。2018 年、留学生受け入れ人数は対前年比で 34%増加した。これら全ての留学生に対し、大学周辺の宿舎での居住を確約している。

2017 年に導入が開始された、英国の大学における教育の質の評価システム Teaching Excellence Framework (TEF) [1]において、最高評価の金賞を取得している。また Times Higher Education による 2017 年の Young University Rankings では 200 位以内にランクインした。社会で活きる能力を重視した実学教育を教育理念としている。1 億 1 億 3 千 6 百万ポンド（約 196 億円）を投じ、キャンパスデザインのトランスフォーメーションを実施している。

英国内で最大の学生流動スキーム(mobility scheme)を有し、学生を海外へ送り出すための経済的援助を積極的に実施している。その結果、これまでに 11,000 名が留学プログラムに参加した。プログラムは長期・短期あわせてさまざまで、外国訪問体験や、異文化を学ぶことに主眼をおいた 1 週間程度の Education Trip や観光レベルのプログラムなども充実している。その中でも、特筆すべき留学プログラムは、「#DMU Global」の New York 研修である。全参加学生に 600 ポンドを奨学金として支給し、これまでに累計 1,000 名以上の学生が参加者している。2019 年 1 月には、New York にて開催された国連のカンファレンス（UN "Together" campaign）にも同プログラムの一環として参加した。

日本には、東京を訪問先としたプログラムを展開。UCAS (The Universities and Colleges Admissions Service) によると、東京のプログラムは、英国内でもトップ 10 の人気を誇っている。

[1] Teaching Excellence Framework(TEF)；英国高等教育機関の教育の質評価を行うシステムで、2017 年に導入が開始された。

パブリック・エンゲージメント担当者による「DMU のグローバル・エンゲージメント」

DMU Global Engagement
Mark Charlton, Associate Director of Public Engagement

”Act locally think globally” を理念として掲げ、世界に向けたボランティアやリサーチを通じて周辺社会に貢献することを目指している。#DMU local projects を展開し、毎年 6,000 名以上の学生がボランティアとして参加している。参加者は週に 12 時間～22 時間のボランティアに従事するもので、これまでに学生が関わった時間は 8 万 5 千時間を超えている。これらにより 2020 年までに 1 千万ポンド（約 14 億円）の公的利益がレスター市に生まれる見込みである。また、これまでに 5 万人を超える学生が、地元(local) および海外(global) の双方で行われたイベントや活動に参加しており、”Act locally think globally” を体現している。

レスター市内でアンケート調査を実施し、調査結果を自治体に提出。この調査結果をもとに、自治体が方策を決定している状況があり、活動が自治体レベルでも大変感謝されている。この活動を発展させ、日本を含めた世界中の都市においても実施することを現在計画中である。

地域との連携に注力しており、地域の子どもが学生からスキルを得るような教育的ボランティアを展開している。いわゆる「座学」によって学んだ事柄を核としながら、スキルや、知識をどのように子供に伝えるかなど、実践に特に力を入れている。

市内におけるコミュニティを支援するプロジェクトの成功を契機として、コミュニティへの取り組みをより国際的なスケールで実施するプロジェクトを開始した。2015 年にインドにおいて「DMU Square Mile India」という教育プログラムを展開しており、スラムを訪問し、英語、ダンス、ドラマなどの教育活動を行い、遊びなどを通じて地域に貢献している。これまでに 2,000 名のインドの子どもたちが本プログラムを通じて教育を受けた。また教育的分野のみに関わらず、建築学を学ぶ学生が住宅を建築、補修するなど、さまざまな方面から地域貢献を行っている。これらの学生が展開するイベントを通じて、毎年 3 万ポンド（約 430 万円）の収益がある。また、本プログラムはイギリスの現地学生だけでなく、世界各国から集まった同大学の留学生も多数参加している。この取り組みが、Times Higher Education から評価を受け、International Strategy of the Year に選出された。

DMU は、「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals, SDGs）の達成に向けて、教育機関として大きな協力を行っている。とくに Goal 16（Peace, justice and strong institutions / 平和と公正をすべての人に）については、Global Hub として国連から選定されるなど、高い評価を得ている。こうした背景には、DMU が取り組んできた、数多くの学生ボランティアやプロジェクト、また正課教育や研究、学生支援など、SGDs で掲げた持続可能社会に向けて、大学全体で取り組んできた姿勢が評価され、社会に認められてきた経緯がある。

留学生リクルートメントとサポートについて

Recruitment and support for International Students
Dan Winney, Area Manager (East Asia), International Office
Andy Gale, International Student Support Officer, Student Services

【入学後に実施される International Party】

【Student Service Centre の様子】

約 2,700 名の留学生を受け入れており、サポートにも注力している。入学してすぐに International Party を開催。現地の学生も含めて交流する機会を設けている。また、International Welcome Week と題し、渡航後しばらくの間、さまざまなイベントを連続的に実施している。入国時にはヒースロー空港まで送迎バスを用意しており、希望者は全員利用できるよう準備されている。

宿舎紹介、レスター市紹介ツアー、健康保険加入、銀行口座開設、周辺飲食施設の紹介、携帯電話を使用するための SIM カード手配など、生活面の幅広い事項についてサポートを展開している。

ノートの取り方やエッセイの書き方指導、無料言語サポートなど、学習面においても幅広い事項についてサポートを展開している。Student Service Centre では心理的なサポートも実施している。

留学生と現役学生を繋げる機会として、5 年前から Buddy プログラムを実施している。これまでに約 1,000 名の学生が参加した。アイススケート、ボーリング、旅行、ゲーム、フードシェアリングなどを通じて、学内での国際交流が進んでおり、毎年 150 名程度の学生が参加している。その他、学生自治会(Student Union) が非常に活発であり、数多くのアクティビティを留学生向けに展開している。

#DMU global について

#DMU global- Leading the way for outward mobility
Leo Smith, Head of #DMU global

学修の充実や異文化理解、就業力向上を目的とした海外プログラム。Mass trip（集団での海外体験留学）、Summer school、Volunteering、Student-led trip（モジュール/プログラム化された短期海外体験留学）、エラスムス協定/交換留学（協定校での学期・年間留学）、Internship（就業体験）などさまざまな留学機会を学生に提供し、60 か国を超える国々へ向けて 11,000 名の学生が海外留学を経験した。参加学生の 96%がこのような留学プログラムに満足している。

大学のミッションとしては、学内の国際化、世界中の大学や企業と協力して有意義な経験を提供すること、エラスムス協定などを通した交換協定の拡充、文化意識と語学力の向上を掲げている。学生にとってのメリットとして、知識、就業力、語学力の向上、自己啓発、異文化理解、自立心を養う、ネットワーク構築が挙げられ、学内では、スペイン語、ドイツ語、フランス語、中国語、アラビア語などが人気であり、日本語を学ぶ学生もいる。

【派遣留学先マップ】

国際的な研究連携・協定について

International Research collaboration and partnership
Professor Deborah Cartmell, Associate Pro Vice-Chancellor Research

2014 年に発表された英国の大学の研究業績評価 Research Excellence Framework(REF)[2]では、58%の研究が世界トップレベルもしくは、国際的に優れいていると評価されている。SDGs 達成のためのハブ機関として国連から選定されており、現在 30 の研究機関を保有している。

海外協定校の開発・マネージメントについて

Development and management of overseas partners
Adam Percival, Progression Co-ordinator, International Office
Duncan Hepworth, Partnerships Development Manager, Global Partnerships Unit

Recruitment Partnerships

DMU の海外協定校の学生は、求められる学力要件を満たすことができれば、DMU のプログラム（ビジネスコースなど）への転入（2 年時、3 年時、大学院）が許可されている。転入学生も DMU Award（DMU 独自の奨学金）を受給する資格を有する。海外協定校との協定により、スムーズな転入が可能となり、DMU において学びと経験、奨学金、教授・ゲストレクチャーとの関わり、柔軟性あるコースなどのメリットが学生に提供される。

Transnational Education (TNE)

トランスナショナル教育(Transnational Education) とは、海外で英国の大学教育を受講できる制度である。特にヨーロッパ圏内での受講生を増やすことで、複数の機関でより多様な学位取得が可能になる。

2016 年から 2017 年では、144 校の英国の大学が、TNE 教育を行っており、そのうち 64 校は 1,000 以上のコースを海外において展開している。現在、1,500 名以上の学生が DMU のプログラムを受講している。

プログラムの種類：ジョイント・アワード（2 校の大学が共同で実施）、デュアル・アワード、ダブルディグリー（2 つの学位取得）、ブレンド・ディスタンス（遠隔）、フランチャイズ（現地でのコース開講）、ヴァリデーション、ハイブリッド

現状のパートナー：
工学分野：シンガポール（2016 年～）
ビジネス分野：インド（1998 年～）、デンマーク（1994 年～）

今後のパートナー：
工学・建築においてはタイ、コンピューターはラトビア、複数の分野でシンガポール、マレーシア、芸術・シアター分野でアメリカのカリフォルニア。

学部紹介

芸術、デザイン、建築、人文系
Arts, Design and Humanities

- 教育、歴史などの要素を含んだコースを展開。パフォーミングアーツ、ダンス、ファッション、写真等も対象
- 香港やアメリカなど海外の展覧会等でも学生の作品を展示

[2] Research Excellence Framework (REF)；英国高等教育機関の研究の質評価を行うシステムで、2014 年 12 月に結果が発表された。http://www.ref.ac.uk/

- キャンパス内にはギャラリーもあり、建築学科やアート専攻の学生が携わっている

ビジネス、法律
Business and Law
- 学生数：7,767 名
- 350 名のスタッフの内、22%が外国人、30%が Black, Asian, and minority ethnic、51%女性、70%50 歳以下
- ビジネス：会計・財務、ビジネス・経営、起業、経済、人的管理、国際関係、政治、マーケティング
- 法学：法律、会社法、法・犯罪学、人権・社会正義
- 卒業後、IBM、アマゾン、バークレイズ、ブルームバーグ、トヨタなど有名企業への就職実績あり。また、会計学コース修了後は、ACCA（会計士資格）を取得可能

コンピューター、工学、メディア
Computing, Engineering and Media
- グラフィックデザイン、数学などが人気
- IBM, HSBC, デロイトトーマツ、hp、ネスレなど有名企業への就職実績あり
- コンピューターサイエンスは、新しい大学のうち国内 3 位、コミュニケーション・文化・メディアは国内トップ
- 工学部は、アフリカやインドで持続可能な開発プロジェクトも展開

健康、ライフサイエンス
Healthy and Life Science
- 対象分野：応用健康科学、応用社会科学、薬学、看護学・助産学
- 公的なサービス：認知症ケア
- GSK やファイザーなど大手企業と産学連携の上、研究を進めている
- 順天堂大学と看護学の夏期講座を開講

同窓会組織について

DMU Alumni networks
Ty Watson, Head of Alumni

世界中に同窓会支部があるほか、スポーツ、女性、ファッション系などクラブ毎の支部がある。

平等、多様性について

Initiative to ensure/improve equality, diversity and inclusion among students and staff
Antonia Jackson, Senior Equality, Diversity and Inclusion Advisor

学生や教職員における、ジェンダーや人種、宗教などにおける平等、多様性を推進しており、DMU の方針をまとめた憲章 DMUfreedom を推進している。教職員の半数が女性であることや、黒人、アジア系、少数民族の学生が半数を占めているなど、DMU は非常に多様性にあふれる教育機関であり、障害の有無、国籍の違い、性の多様性等あらゆる違いに対して受容されることを憲章として示している。この考えに基づき、具体化した取り組みとして、下記の様々な取り組みが実施されている。

- 多様性に基づく様々な学内ネットワーク組織
- 多様性についての研究の蓄積
- DMU Pride, International Women’s day, Black History Month などのイベント実施
- 性暴力被害へのサポートや学習者のためのユニバーサルデザイン等
- Stonewall (LGBT equality)、Athena SWAN (Gender equality) などの認証取得

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

TNE (Transnational Education) ：デモントフォート大学をはじめ多くの英国の大学が、海外の大学・機関と提携し、多様な学位取得コースを展開している。これにより、英国に留学しなくとも、自国にいながら現地キャンパス又はオンラインシステム等を通し、世界的にも信頼の高い英国の大学の教育を受け、学位を取得できるため、経済的な理由から留学が難しい学生にとっては大きな利点がある。一方で、協定の内容や仕組み作り、他機関のカリキュラムとの整合性を図ること、運営管理は容易ではないことも伺える。

留学に参加する学生への支援：デモントフォート大学では、派遣する学生に対して大変手厚いサポートが行われている。"Act locally think globally"の精神に則り、長期から短期まで、さまざまな留学プログラムの選択肢が存在し、学生にとって希望する留学先を選定しやすい環境が整えられている。また何といっても資金面の援助が手厚いことが、同大学の派遣留学生数増加につながっていることは間違いないであろう。日本と英国では、学費、政府からの補助金、寄付金など、大学の収入構造が大きく異なるが、日本と同じ内向き志向と言われる英国の学生をこれほどまでに海外に送り出している実績とその政策は参考すべき部分が多い。

5. 報告者所感

革新的な取組みが多く見られた。特に「#DMU global」のニューヨーク研修や「#DMULocal」でのインド派遣など「団体研修」のような海外派遣プログラムの実施は、内向き志向の UK 学生をいかに海外へ送り出すかを検討した上で多くの参加者を集めた成功例の一つと感じた。また、就業力（エンプロイアビリティ）の高さや、元オックスフォードのビジネススクールのディレクターが学部長を務めるビジネススクールのアピールは、卒業後の就職が不安な学生や社会のニーズに合わせた戦略であると考えられる。さらに、大学内の各部門で数値的目標を掲げたり、世界大学ランキング（THE、QS など）での受賞歴、REF/TEF の獲得アピールなど、広報戦略に注力していることが、大学スタッフの説明並びにキャンパスツアーでの広報物（バナーやポスター等）からも伺えた。

DMU にはまだ日本人留学生が少なく、さらに UK 学生向けの日本語専門のコースもないため、まだ日本との関係性は薄い印象であった。また、UK 学生による EU 以外への海外留学は、単位移行の制度・仕組みが整っておらず、一年留学をすると三年間（学士課程）で卒業するのが難しく、日本へ学期・年間留学として送り出すにはまだハードルが高い模様。よって、上述「#DMUglobal」などの短期プログラムから日本の大学との連携の可能性を広げていくことが現状の課題なのではないかと考えられる。

TNE について：現在、日本の大学は、遠隔的にコースを受講できる制度や海外の分校、海外で学位を取得できる仕組みをほとんど持っていない。少子高齢化の日本では今後、学生獲得において海外の大学との競合が避けられないため、日本国内での柔軟な教育制度の推進や教育のグローバル化が重要だと実感した。

今回の視察を通じて、多数の英国の大学が世界大学ランキングにおいて上位にランクインしている理由を目の当たりにしたと感じている。まずは、質保証および外部評価を意識した大学運営である。TEF や REF をはじめとした大学評価基準が国レベルでしっかりと整備されているため、大学が目指すべき方向性が定めやすい。同評価制度の結果が、学生の獲得などに大きな影響を及ぼす環境におかれているわけであるが、グローバル社会において、日本の大学が生き残っていくためには、明確な目標の設定と、偏差値ではなく教育内容で優秀な大学が選ばれるような環境を整備していくことが大切ではないかと感じた。また、大学自身のグローバルマインドにも差を感じた。日本の大学は、島国という側面や自国で一定の高等教育を提供できる環境が早くから整備されていたことに起因し、内向き志向が強く、従来の文化に縛られてしまう部分も多い。SDGs などの世界が全体として保有する目標などについて向き合っている事例がまだまだ少ないことを痛感させられた。英国で展開されている高等教育に今後も注目しながら、日本の高等教育の発展を進めるマインドで日々業務に当たらなければならないと感じた。

（報告担当：飯島、島田、地村、中原、原）

UNIVERSITY OF NOTTINGHAM
27 FEBRUARY 2019

1. 大学の概略

ノッティンガム大学は、イングランド中心部 ノッティンガムの最初のカレッジとして 1881 年に設立し、1948 年にノッ ティンガム大学となった。人文学（Arts）、工学（Engineering）、医学・保健科学（Medicine and Health Sciences）、理学（Science）、社会科学 （Social Science）の学部・研究科において様々な学科が提供されている総合大学である。英国の大規模研究重点型大学 24 校で構成する ラッセルグループに所属しており、世界的な研究成果を上げている。ノーベル医学生理学賞及びノーベル経済学賞の 2 人のノーベル賞受賞者を輩出し、QS World University Rankings（2019 年 3 月時点）では、世界で 82 位に位置している。2014 年に発表された英国の大学の研究業績評価 Research Excellence Framework(REF)では研究力において英国で 8 位についた。

ノッティンガムキャンパスには 34,329 名の学生（Part-time 含む）が在籍しており、留学生は約 10,000 名在籍している。国際的な教育の提供を目標としており、英国の大学では初めて、1999 年にマレーシア、2006 年に中国で海外キャンパスを開設した。マレーシアキャンパスでは 4,779 名、 中国キャンパスでは 7,161 名の学生が学んでいる。

2. 訪問スケジュール

時間	内容
10.00-10.05	歓迎の挨拶 Welcome Jason Feehily, Director of Knowledge Exchange Asia, Head of Asia Business Centre
10.05-10.35	国際戦略の開発と推進 Development and implementation of corporate international strategy Gail Armistead, Associate Director, Office of Global Engagement
10.40-11.10	海外パートナー大学との学生交流 Development and management of overseas partners: student exchange, credit transfer, double degrees/joint degrees Gail Armistead, Associate Director, Office of Global Engagement
11.25-11.55	サマープログラム Summer programmes Isobel Mosley, Global Engagement Administrator, Office of Global Engagement
12.00-12.20	アルムナイネットワーク Alumni Network Georgina Woolley, Senior International Alumni Relations Manager
12.20-12.30	日本の参加3大学等によるプレゼンテーション
12.30-13.00	Nottingham 大学の日本出身者、日本との共同研究等、日本に関連した教員による自己紹介
14.00-14.45	学生によるキャンパスツアー
14.45-15.15	国際研究戦略 Global Research Strategy Richard Masterman, Associate Pro-Vice-Chancellor Research Strategy and Performance

15.20-15.50	国際研究連携とパートナーシップ International research collaboration and partnership Liz French, Head of Strategy, policy, performance & Impact, Financial & Business Services
16.05-16.35	研究以外のパートナーシップ Partnerships outside of research Jason Feehily,Director of Knowledge Exchange Asia, Head of Asia Business Centre
17.00-17.10	総括 Associate Pro-Vice Chancellor (Research Strategy, performance)
18.30-18.45	学生および教職員に対する公平性（Equality）、多様性（Diversity）、包括性（Inclusion）の保証と改善への取組み Initiatives to ensure/improve equality, diversity and inclusion among students and staff Professor Sarah Sharples Pro-Vice-Chancellor for Equality, Diversity and Inclusion

3. 発表要旨

国際戦略の開発と推進について

International Research Partnerships Strategy Development and implementation of corporate international strategy
Gail Armistead, Associate Director, Office of Global Engagement

ノッティンガム大学は、英国内で最も国際展開が活発な大学の一つと評価されている。直近の戦略においても、大学運営に係るあらゆる面において、特に教育と研究分野に国際戦略を組み込むよう取り組んでいる。

2010 年頃までの英国国内における国際戦略は、海外から留学生を受け入れるものが大半であったが、ノッティンガム大学では早い段階から、受入に加えて海外へ派遣する必要があると考えてきた。英国人学生に限らず、EU 諸国等の国外からの学生も対象とし、海外留学のサポートを行ってきた。国際的なネットワークである同窓生組織の影響も大きく、大学の国際展開に重要な役割を果たしている。

ノッティンガム大学では、国内のキャンパスの他に、マレーシアと中国の 2 つの海外キャンパスを展開しており、国際的な学生のコミュニティを拡大するとともに、世界中からスタッフを採用している。3 キャンパス合同でスポーツやアートに関するイベントも開催しており、マレーシアや中国への留学に興味がない学生にも国際交流を促す良い機会になっている。同窓会担当オフィスとも協力しながらこうしたイベントを定期的に開催することにより、ノッティンガム大学の取組みを企業にアピールする良い機会にもなり、学生とのマッチングや大学への寄附に繋がることも期待している。

ブレグジットのような政治的な変革もあり、国際戦略を 2017 年に一新し、さらなる目標に向かって行動していくことになった。特に重要な戦略としては、大学の教育・研究戦略を後押しするような国際的ネットワークを発展させる、大学のコミュニティ全体に大学の地球規模的な活動について広く周知する、すべての学生に対して国際的な雇用の機会を創出する、等が挙げられる。

海外パートナー大学との学生交流について

Development and Management of Overseas Partners
Gail Armistead, Associate Director, Office of Global Engagement

学生の海外派遣

ノッティンガム大学は、2020 年までに全学部生の 30%を海外に派遣することを目標に掲げ、目標達成のために主に以下の 3 つの取組みを行っていた。

1)「全学部の学生が海外へ留学するための支援を行う」
ノッティンガム大学では、学部ごとに海外留学者数の統計を出したところ、コンピュータサイエンスの学生の海外派遣者数がとりわけ低かった。これはコンピュータサイエンスの学生が就職に困らないため、海外留学経験を企業へアピールする必要がない事が原因であることが分かった。また、学生によっては海外留学というのは国際関係学部の学生や、外国語を習得することを目的とする学生がするものであるというイメージを持っていることも原因であることが分かった。そのため、このような学生のマインドを変えていくことが課題であった。一方で「卒業した学生が学生時代にやり残して後悔していることは何か？」という問いに対して「もっと勉強しておくべきだった」でも「もっと友達を作ればよかった」でもなく、「海外留学をしておけば良かった」ということであることが分かった。就職してから海外留学をすることは環境的に難しいことだということに卒業してから気が付く学生が多いことが分かり、学生に早い段階からそのことに気づくよう働きかけている。

2)「学内の就職戦略の中で海外留学経験の利点を広めること」
企業のグローバル化に伴いコミュニケーション能力の高い学生や異文化への適応能力の高い学生が企業から必要とされている。海外留学や海外インターンシップを経験することでこのような能力を身につけているということを企業にアピールすることができるため、就職に有利になるということを学内の就職戦略で学生に周知することが大切であるようだ。学生はキャリア志向のため、就職と絡めた戦略が重要であると語っていた。

3)「留学経験を最大限に引き出すこと」
海外留学をして帰国した学生の多くが、どのような経験をし、そこから何を学んだのかということを語ることができなかった。これでは留学の効果が十分に得られないと考えた Office of Global Engagement が E ラーニングコース Nottingham Open Online Course（NOOC）を準備し、留学前後において学生が異文化交流などについて学ぶことができるようにしている。学生はコースの受講により 10 単位取得することができ、留学を予定していない学生も受講することが可能である。

サマープログラム

Summer Programme
Isobel Mosley, Global Engagement Administrator, Office of Global Engagement

サマープログラム全体について

ノッティンガム大学の Office of Global Engagement は、受け入れと派遣のサマープログラムを担当している。協定校からの学生を受け入れるプログラムは、ほとんどテーラーメイドのものである。大学側として、サマープログラムの受け入れや派遣に力を入れている理由は、①協定校との交換枠のバランスの維持、②入学希望者への多様な海外留学プログラムの提供、③掲げている学生モビリティーの目標到達、のためである。一方で、学生側として①長期留学と比較して費用負担が低度で済む、②コミットメントが少ない、③選択できる専門分野に柔軟性がある、④留学先の国や町を知る機会になる、⑤将来、長期留学や海外での勤務のきっかけとなる、等の理由が挙げられる。

受け入れプログラム

受け入れのプログラムの企画・運営は、各学部の協力を得て実施している。サマープログラムは、社会的・文化的体験を目的としている。受け入れ学生に対して全面的なサポート（オリエンテーションなど）を提供しているほか、ウェルカムデーや近郊の町や観光スポットへの小旅行も実施されており、英国の文化をより深く理解してもらえるよう工夫を凝らしている。これまでは、ケンブリッジ、チャットワース・ハウス、ノッティンガム市内を訪れた。また帰国後のフォローアップアンケート（無記名）なども行われ、今後のプログラム運営に活かされている。現在、ノッティンガム大学が手掛けている受け入れサマープログラムには、次のものがある。

① 天津中医薬大学プログラム（3 週間）

ノッティンガム大学の薬学部とのコラボレーションで、中国の天津中医薬大学から学生を受け入れている。プログラムの目的は、薬学と英語を学ぶこと。

② 立命館大学サマープログラム（4 週間）

立命館大学から学生を受け入れ、英語を学ぶプログラム。

③派遣プログラム

次に、ノッティンガム大学の学生が参加できるサマープログラムについて紹介する。

近年、ノッティンガム大学の学生は、1 学期・1 年間の交換留学よりも、サマープログラムの短期留学を好む傾向にある。2019 年現在、12 か国において 18 個のプログラムがある。具体的には、北米ではメキシコ（1 つ）、欧州（7 つ）、中国（5 つ）、香港（2 つ）、そしてシンガポール、マレーシアと韓国にはそれぞれ 1 つのプログラムがある。また、'Global Leaders Experience Abroad' という、リーダーシップ育成の特別プログラムもある。2019 年度において、100 名の学生を短期プログラムに派遣するという目標を掲げている。

応募方法については、2 月に応募が開始され、学内選抜が行われる。ノッティンガム大学を通して、サマープログラムへ参加する学生は、生活費のみを負担し、参加費は免除されている。志望動機の内容と成績順にランク付けされるが、最終学年ではない学生と、これまで海外留学の経験がない、あるいは、カリキュラムに海外留学が必須項目ではない学生が優先される。受け入れプログラムと同様に、派遣する学生へのサポートが行われている。例えば、出発前と帰国後のオリエンテーション、協定校の応募時のサポートや、競争率は高いが、奨学金の支援などがあり、できるだけ学生にとって円滑にプログラムに参加できるようにしているという。

最後に、サマープログラムのアカデミック性が増しているが、現在、プログラムで取得した単位は互換できない。そこで、将来的に互換ができるように、現在模索中であるという。

アルムナイネットワーク

Alumni Network
Georgina Woolley, Senior International Alumni Relations Manager

1）アルムナイネットワークの概要

近年、ノッティンガム大学ではアルムナイネットワークの構築・強化が進んでいる。現在の同窓会の構成人数は 280,000 名である。その内 13,850 名が寄贈者、1,700 名がイベント時のボランティアサポートである。また、6,700 名がこれまでの同窓会のイベントへ参加したことがあるという。同窓会のメンバーとして認められるには、少なくともノッティンガム大学で 1 学期間学生か研究者・教員として在学・在籍する必要がある。つまり、交換留学生も同窓会のメンバーとみなされる。同窓会を担当しているオフィスは 8 名のスタッフで構成されている。地域別や時期別に担当が分けられており、ネットワークの強化やイベント運営などに携わっている。同窓会メンバーとの連絡方法は、メール（41%）、そのほか手紙、SNS などである。

2）同窓会会員が受けられるサービス

同窓会のメンバーは、下記のサービスを受けることができる。

- 同窓会 SNS へのアクセス（Facebook, Instagram, Twitter, LinkedIn 等）
- 年間雑誌と e-マガジン(月単位)
- キャリアサポート
- 同窓会員同士のネットワーク拡大のためのセミナーへの参加
- インターネットを通じて、同窓会員と学生の指導を受けることができる
- 同窓会・ボランティアへ貢献した方への賞与

ノッティンガム大学では、同窓会員から一方的に何かを得るのではなく、構成員へも何か還元できるように様々なサービスを提供するようにしている。

3）同窓会のイベントと大学との連携

同窓会は、メンバーの協力を得て戦略的に世界各地で様々なイベントを開催している。開催の目的は同窓会同士のつながりを深めるだけではなく、同窓会の存在、また、ノッティンガム大学の存在を示すためである。そのためには、次のイベントが実施されている。

- 同窓会メンバーと学生のスポーツ大会

- 北米でのイベント（2 回/年）
- 香港でのイベント（3 回/年）
- シンガポール （1 回/年）
- ビジネスリーダーシップセミナー
- 様々な業界に関するセミナー
- 卒業式と同窓会
- メンバーが個人で開催するイベントへのサポート

イベントは、同窓会担当オフィスが主催するのではなく、各地でボランティアを募り、同窓会のメンバーが自主的に企画・運営している。ボランティアがイベントの中心的役割を担うという試みは 2 年半前から行われており、功を奏しているという。同窓会は、メンバーに向けた活動に加え、ノッティンガム大学と様々な面で連携しながら、メンバーと学生をつなぐための取り組みも行っている。例えば、学生のリクルート、同窓会メンバーを迎えての講演、産学連携への協力などである。

4）今後取り組み

これまで、同窓会担当オフィスは様々な活動に取り組んできたが、同時に、多くの検討課題が浮き彫りにもなり、特に下記の項目に取り組んでいきたいと考えられている。

1. 大学と連携したイベント数の増加
   現在ある人脈を活かしながら、学生や地域により深いインパクトを与えるには、どのようにすればいいのかを検討する。
2. 同窓会のメンバーの中のノッティンガム大学の社会的存在意義
   ノッティンガム大学はどのように認識されているのか、反対に大学側はどのように認識してもらいたいのかとなど、大学の社会的存在意義を認知してもらい、今後も積極的に大学と何らかの関わりを持ちたいと思ってもらえるように考える必要がある。
3. 同窓会メンバーのこれまでに軌跡を探る
   現在のメンバーがこれまでに、どのような形で同窓会と関わってきたのか、または、同窓会から何を得たのかなどを探る。そして、同窓会に関わり続ける理由や寄付金などの形で大学へ貢献したいと思えるようになった要因を明らかにすることができると考え、今後取り組みたい点である。
4. コンテンツ戦略
   どのようなコンテンツをどのようなプラットホームでメンバーに提供するのかについて、より戦略的に実施したいため、今後検討していく。

キャンパスツアー

会場

キャンパス

キャンパス内の宿泊施設の裏庭

卓球台（風が吹くとゲームができないので使用する人は殆どいない）

国際研究戦略

Global Research Strategy
Richard Masterman, Associate Pro-Vice-Chancellor Research Strategy and Performance

1）ノッティンガム大学の研究環境

ノッティンガム大学には、英国、中国、そしてマレーシアにキャンパスがあり、学生数はそれぞれ、34,329 名、7,161 名， 4,779 名である。また、総合大学であるとともに、研究機関としても世界トップレベルを誇る。

2014 年に発表された英国の大学の研究業績評価 Research Excellence Framework(REF)では、8 位を誇っている。また、ノッティンガム大学で行われている研究の 97%が、国際的に評価されている実績を持つ。研究者は 3,000 名（ポスドクを含む）、研究資金は約 6 億ポンド（約 860 億円）に上る。そして、研究施設も一流のものを兼ね備えている。

2）研究のビジョン

ノッティンガム大学の今後の研究ビジョンは、今日のグローバル社会が抱える問題を解決するために、世界トップレベルの研究を提供することである。そのためには、下記の目標を掲げている。

研究の質を高める：研究の質を、現在のレベルから 40%強化する。つまり、REF において最高レベルである 4 スターのスコアをさらに上げること。

1. 研究資金：研究資金を現在の金額から 50%増加させること。
2. インパクト：研究が与えるインパクトと知識の交流方法を大きく変革させること。
3. 大学の評判：大学のプロファイルと評判を一層高めること。

このように、現在の研究レベルを維持する方向ではなく、上述の目標を掲げることにより研究機関としての質を高めるために意欲的に取り組んでいる。

3）エコシステムへの投資

ノッティンガム大学は、図 1 が示すエコシステムへの戦略的な投資を進めている。

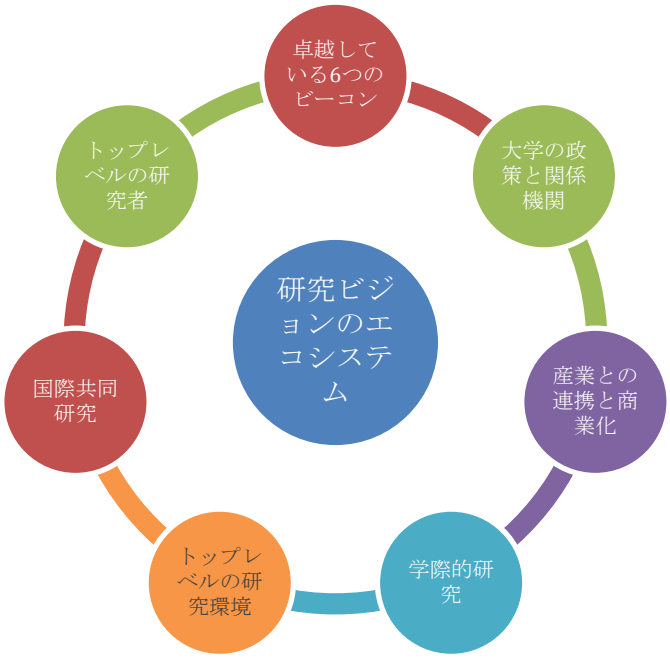


図 1 研究のエコシステム

今回の訪問で説明のあったエコシステムの要素について、下記の通り簡潔に報告する。

a)6 つのビーコン

6 つのビーコンというのは、多くある研究分野の中で特に卓越している分野で、重点的に投資し進める研究の柱のことである。

1. Future Food: 世界の人口が増える中、食料不足を防ぐための解決方法を探る。
2. Rights Lab: 世界に残存する奴隷制度の撲滅方法を探る。
3. Precision Imaging: 結像精度を駆使し、医療分野の発展を目指す。
4. Propulsion Futures: 持続可能な材料の開発と電気輸送の研究を進める。
5. Green Chemicals: 化石燃料の代替燃料を開発する。
6. Smart Products: 情報処理機能を使い、製品の製造過程への新しいアプローチを進める。

b) トップレベルの研究者

現在、100 名ほどの研究者を世界中からリクルートしている。その他にも、博士課程のためのトレーニングプログラムが 4,000 を越えており、将来の研究を担う優秀な博士課程の学生を育成する制度が整っている。その上、研究のスキルに限らず、リーダーシップを育成するプログラムまで用意されており、総合的に優秀な研究者を育てている。

c) 国際共同研究

国際共同研究については、国際共同研究をスタートさせるための資金が研究者に支給されている。また、多様なアプローチで海外の研究者や研究機関とのつながりを構築（あるいは強化）している。ネットワークとしては、Universitas 21 や RENKEI (Japan- UK Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives)へ参加している。日本との共同研究については、2015 年から 2018 年の間 144 の高等教育機関と共同執筆し、291 本の論文を発表している。

d) トップレベルの研究環境

ノッティンガム大学の研究環境はトップレベルであり、多額の設備投資をしている。その中で、秀でている施設のとしては、MRI の分野における 'The Sir Peter Mansfield Imaging Center'、植物成長施設と表現型検査施設、ナノスケールとマイクロスケール特性解析、核磁気共鳴、そして先端的製造業施設と航空宇宙科学である。その他にも外部からの資金を受けている 27 の機関とセンターがある。

e) 学際的研究

学際的な研究として、優先順位の高い研究の分野がある。それらは、デジタルの未来、文化とコミュニケーション、持続可能な社会の発展、保健と福祉、変革技術である。総合大学である強みを生かし、分野をまたぐ研究を重要視している。

以上のようにノッティンガム大学は、研究ビジョンを実現させるために、4 つの目標を掲げており、エコシステムを明確にした上で戦略的に投資していると言える。

国際研究連携とパートナーシップ

International Research Collaboration and Partnership
Liz French, Head of Strategy, Policy, Performance & Impact, Financial & Business Services

現在ノッティンガム大学では、国際共同研究の拡大に向けて海外の大学との連携を進めており、以下のコンソーシアムネットワークに参加している。こうしたパートナーシップは、国際共同研究の推進戦略において非常に重要であると考えている。

1. RENKEI：ブリティッシュ・カウンシル主催の、日英のそれぞれ 6 つの研究重点大学が新たな国際共同研究を創出するためのパートナーシップである。ノッティンガム大学は、特に強みとする保健研究分野において、2020 年までに日本の大学との共同研究を推進しながら世界をリードしていきたいと考えている。
2. Universitas 21：日本の早稲田大学も含めた研究重点大学 27 大学が参加しており、研究だけでなく教育等その他あらゆる分野における連携を目的としたネットワークである。
3. ECIU：EU 諸国間のネットワークであり、研究におけるイノベーションとインパクトを重視したものである。

国際共同研究戦略において、ノッティンガム大学では、あらゆる段階でのサポートを行っている。初期段階では、大学自身が資金提供を行う「国際協働資金」を通して、新しい共同研究の開拓を後押ししている。本資金は、分野を限定せずすべての研究者が申し込むことができ、新しい共同研究を開拓するための海外の研究機関への渡航費や滞在費用として活用されている。その結果、年間 50 から 60 の共同研究プロジェクトが開始され、その成功率も高い水準にある。

実際に開始され進行中の国際共同研究についても、大学からのサポートや日本学術振興会（JSPS）、リサーチカウンシル等の外部の研究機関からのサポートも得て行われている。大学として国際的な研究ネットワークにも積極的に参加し、国際会議等を通して共同研究の機会を広げている。国際共同研究にかかるサポートにおいてキーとなるのは、まずは研究者自身が海外に出向く機会を増やすことだと考えている。

こうしたサポートの成果もあり、各国の大学と多くの共同研究を進行しているが、日本で言えば、京都大学や大阪大学、九州大学、北九州市立大学と共同研究を実施している。

英国国内における研究投資については、地球規模課題である 3 分野に対して Global Challenges Research Fund(GCRF)と呼ばれる資金から重点的に投資がなされている。ノッティンガム大学が進行している、バングラデシュやネパールで行われているプロジェクトもその一例である。

国際共同事業のタイプの例としては、以下のとおりである。これらの他、大学が保有する MRI 等の最新の研究機器や施設の共同利用も他大学との共同研究の一環として活用されている。

1. ジョイント PhD 交流プログラム：オーストラリアのアデレード大学との例は、農産物研究の分野で双方の学生を同人数ずつ交換し、各大学で数年ずつ研究した後、2 大学のジョイントプログラムの学位を取得させるものである。この他、募集対象を留学生のみとした他プログラムも実施している。
2. スタッフ交流：主にポスドクの研究員が対象となり、数カ月間別の研究室で研究を行うことで、新たな研究方法等を学ぶ良い機会になっている。
3. リサーチフェロー訪問：世界中から優秀な研究者を呼び込む目的で、研究者に 1 か月から 12 か月間ノッティンガム大学で研究をしてもらい、その後の共同研究に繋げるものである。

研究以外のパートナーシップ

Partnerships outside of Research
Jason Feehily,Director of Knowledge Exchange Asia, Head of Asia Business Centre

1）Continuing Professional Development（CPD）

CPD とはいわゆる社会人教育のことである。夜間コースから専門的トレーニング、E ラーニング、MBA のオーダーメイドコース、そして海外大学との連携コースなどがある。また、バイオサイエンス、ビジネス、教育、法律、外国語、薬学、獣医学など幅広い分野のコースを提供している。

例えば、以下のようなコースがある。

- 外国語 「フランス語講座」 レベル 1～5、週 1 回、1 時間、20 週
  費用：ノッティンガム大学の学生　240 ポンド、それ以外　260 ポンド
- 法律 「公共調達法と政策のプログラム」
  受講条件：法律の学位や法的訓練は不要。期間：10 か月～2 年間、費用：3,500 ポンド～10,000 ポンド
  公共調達に関する法規則の設計と実施を担当する政策決定者
  対象：法的ルールの理解を必要とする調達担当者、弁護士など

2）Asia Business Centre

ノッティンガム大学のアジアビジネスセンターは、アジアにおける政策、商業および文化活動に関する専門家による助言サービスを提供している。中国とマレーシアにキャンパスを持つ最初の英国の大学として、アジアの中でのネットワークを活用して、産業界とのコネクション、研究協力の機会を提供している。また、アジアにおける大学の活動のための情報も提供している。

アジアでの事業のために提供する主なサービス：

- アジア各地の地方自治体、中央政府、産業界、研究者、機関とのネットワークを活用し、共同関係の構築を促進
- 市場や国の情報と依頼者からのオファーを的確に調整
- アジアのベンチャービジネスで成功するために必要な強力なパートナーシップを構築するために役立つ文化的なアドバイスを提供
- ノッティンガム大学の卒業生と留学生が、さまざまな分野の専門知識を提供し、アジアでビジネスをするサポート
- 専門的な経営者教育と継続的な専門能力開発プログラムを提供

学生および教職員に対する公平性（Equality）、多様性（Diversity）、包括性（Inclusion）の保障と改善への取組み

Initiatives to ensure/improve equality, diversity and inclusion among students and staff
Professor Sarah Sharples Pro-Vice-Chancellor for Equality, Diversity and Inclusion

ノッティンガムは、Equality、Diversity、Inclusion（EDI）を非常に重視しており、イギリス国内では、オックスフォード大学のほかに EDI 専任の副学長を置く唯一の大学である。

世界的に事業を展開する企業において、多様性を持たせることがより良い企業判断に結び付くと考えられており、本分野への取り組みや投資がこれまで以上に重要となっている。その為、より安心できて過ごしやすい大学環境を整えるために、学生だけでなく、スタッフへの支援も行うことが必要である。

大学内における課題の一例として、STEM 分野での教授レベルの女性比率が低い、方針や意思決定等に多様性や公平性の概念が重要視されていないこと等が挙げられる。そこでノッティンガム大学では、EDI の概念をすべての活動に浸透させていく戦略により、大学の課題へアプローチすることとしている。

まず、すべての教職員、学生にとって公平性（Equality）を確保できるよう、データ分析を行い、問題がいつなぜ起きたか理解を進めながら、それまでの手法や考え方について改善を試みる。一例として、人事面において、先入観を極力減らすために、匿名での教員の採用活動を試みた事例がある。あえて名前や前在籍大学名を問わず採用したことが、結果として人材の多様性につながったことから、この取り組みが広がりを見せている。

また、組織における多様性（Diversity）や包括性（Inclusion）への実践的な取組みとして、LGBT 関連のイベントを行った際にキャンパス内に虹色の旗を掲げた。組織変革ほどの劇的な取り組みではないが、LGBT のスタッフや学生にとっては大きな意味を持ったと考えている。

ノッティンガム大学は、本分野において最も進んだ大学になるべく、革新的な活動を行ったスタッフへのサポートはもちろん、表彰も行っている。EDI 概念の推進に向けた取り組みについては、大学内だけにとどまらず、ノッティンガム地域や同窓生組織も含めた世界的なコミュニティでも活動を展開していきたいと考えている。社会経済的な視点からみた具体的なアプローチとして、建物のデザイン、会議等での食事、求人広告における使用言語、教職員や学生の態度等があげられるが、重要なことは「世界を EDI のレンズを通して見る」ことである。

4. 報告者所感

今回のノッティンガム大学視察訪問で特に印象的だったのは、研究のビジョンが非常に明確にあることと、同窓会の構築や維持に力を入れている点だ。研究ビジョンにおいて、興味深かったのは、研究者育成と設備投資のための資金が多い点だ。発表の中では、日本が研究に巨額を投資していると触れられたが、果たしてそうであろうかと疑問に感じた。文系の分野への重要視は薄れる傾向にあり、理系の分野への研究資金は多くあるが、ノッティンガム大学や他の英国の大学と比較するとどれぐらい違うのかに興味を持った。また、大学全体で戦略を立て共同で進めている点も、日本の大学（少なくとも自分の知る限り）と異なる点であり、参考になった。同窓会の発表で勉強になったのは、同窓会会員をリソースとしてとらえ最大限に活かそうとする考え方だ。ただ、一方的に寄付金や協力を求めるのではなく、同窓会メンバーに対しても様々なサービスを提供しているでは日本と異なる部分だと気づいた。

どの大学でも、国際的な研究パートナーシップ構築に非常に意欲的であった。留学生確保においても、広報活動や学生対応等非常に力を入れており、学生満足度が高いといわれている理由をうかがい知ることができた。日本国内の大学間だけでなく、国同士の留学生の獲得競争が激しくなる中で、ノッティンガム大学の 3 拠点におけるトライキャンパスシステムは、現地でのリクルートができるため、優秀な学生を集めやすい画期的なシステムだと感じた。また、単に集めるだけでなく、Equality、Diversity、Inclusion を積極的に推進する等、スタッフも含め多様な人材を大学に定着させるための取り組みは非常に重要であると感じた。今後の留学生の獲得競争の中で海外から優秀な学生を日本の大学に集めるためには、社会の意識変化を含め、各省庁や大学全体で協力していく必要があると感じた。

学生の海外派遣について、単に派遣者の数を増やす取り組みからさらに一歩先に進んで、海外留学者の少ない学部についてその理由を分析し、どのように動機づけをするか戦略を練り、海外留学の経験を学生にとってより有意義なものにするため、学習の場を提供していることがとても興味深かった。

また、ノッティンガム大学だけでなく、英国の 4 大学を訪問して感じたことは、学生が良い企業へ就職するための意欲が高いことである。そのため、学生に海外留学や社会貢献活動などの活動に参加させるための動機づけとして、就職に有利であることを広めることで学生の関心を集めていた。また、大学側も各学部に就職サポート室を置くなど就職のサポートに力を入れていた。一方で、2017 年から英国政府による Teaching Excellence Framework(TEF) という英国の大学における教育の質の評価システムが始まった。教育が研究と同等に評価される文化を醸成すること等を目的としたシステムではあるが、この指標にもやはり「進学・就職率」が含まれている。教育力を進学・就職率で計ることに少し違和感があるが、このような政府の姿勢も、大学が学生の就職サポートを強化し、就職を意識した戦略実施することに繋がっていると感じた。

（報告担当：楠元、高橋、寺沢）

ノッティンガム大学の Blog 記事からの抜粋写真

http://blogs.nottingham.ac.uk/newsroom/2019/03/06/university-builds-links-with-japanese-universities/

COVENTRY UNIVERSITY 28 FEBRUARY 2019

1. 大学の概略

1843 年創立、イングランド中央部、コベントリーに位置する国立大学。英国の職業教育特化型の高等教育機関である Polytechnic に起源を持ち、1992 年に現在の形へと移行した。学生数は、34,500 名以上（18,000 名はオンライン）で、150 ヶ国以上、17,100 名以上の留学生を有する国際色豊かな環境。近年、英国のガーディアン紙の大学ガイド 2019 において、近代に設立された大学群の中ではトップにランキング され、また、サンデータイムズ紙による大学ガイド（The Complete University Guide）では、学生体験部門において、「今年の大学」（最優秀の大学に贈られる賞）に選ばれた。2020 年までの国際戦略に関する行動指針に基づき、学生に対して海外留学の機会を提供する だけでなく、1 億 2 千万ポンド以上（約 173 億円）を研究専門スタッフと研究設備に投入するなど、大規模な研究戦略を推進。日本の大学との博士課程におけるジョイントプログラムの展開にも関心が強い。

2. 訪問スケジュール

時間	内容
10.00- 11.00	歓迎の挨拶、コベントリー大学の研究戦略 2021 'Excellence with Impact'- Coventry's Research Strategy to 2021 Professor Richard Dashwood, Deputy Vice Chancellor for Research コベントリー大学の国際戦略 2020：発展と実施 Coventry Internationalisation Strategy 2020: development and implementation Barbara Tully, Associate Dean International Faculty of Arts & Humanities
11.00- 12.30	コベントリー大学の特色のある研究紹介 Horiba-Mira 自動車エンジニアリングプロジェクト HORIBA-MIRA Vehicle Engineering Project -Coventry University - HORIBA MIRA Partnerships: shared objectives and benefits Dr Anthony Baxendale, Head of Future Transport Technologies at HORIBA MIRA -Connected & Autonomous Automotive Research Professor Mike Blundell and Dr Stratis Kanarachos -Overview of Future Transport and Cities (FTC) Capabilities Kevin Vincent and Richard Waine -Overview of Cybersecurity Research and partnerships Dr Hoang Nga Nguyen
14.00- 14.45	キャンパスツアー（データセンター、看護学部施設：介護ロボットなど） Campus Tour
14:45- 15:30	学部紹介 -Introduction of Faculty of Business and Law (Professor Nigel Berkeley, Associate Dean for Research) -Tokyo 2020 Paralympic Games: Social impact and Sports Management Aspects of Disability (Assistant Professor Dr. Iain Brittain)
15.30- 16.30	国際連携業務（国際交流、サマースクール、オンラインコース） Centre for Global Engagement (Interim Co-director Albina Szeles) Student Mobility: Oncoming and Outgoing (Ms Jessica Bird) Summer Schools (Ms Shawnna Pomeroy) Virtual mobility (Ms Ruth O'Brien)

3. 発表要旨

コベントリー大学の研究戦略・国際化連携戦略

'Excellence with Impact'- Coventry's Research Strategy to 2021
Professor Richard Dashwood, Deputy Vice Chancellor for Research

Coventry Internationalisation Strategy 2020: development and implementation
Barbara Tully, Associate Dean International, Faculty of Arts & Humanities

コベントリー大学は、教育大学として英国でも屈指の評価を得ているが、今後は世界的なレベルでの研究大学を目指す。教育における基本方針については、引き続き、可能な限り幅広い分野をカバーする。研究については、戦略目標を定め、重点的に投資を行う。

戦略目標は以下の５つ

- Protect: 安全や IT 社会における「セキュリティ」
- Pioneer: データサイエンスと人工知能
- Discover: 文化創造（コベントリー市が英国政府より 2021 年の文化都市に選ばれたことと関連）
- Regenerate: 持続可能な社会の実現
- Transform: 健康・ウェルビーイング

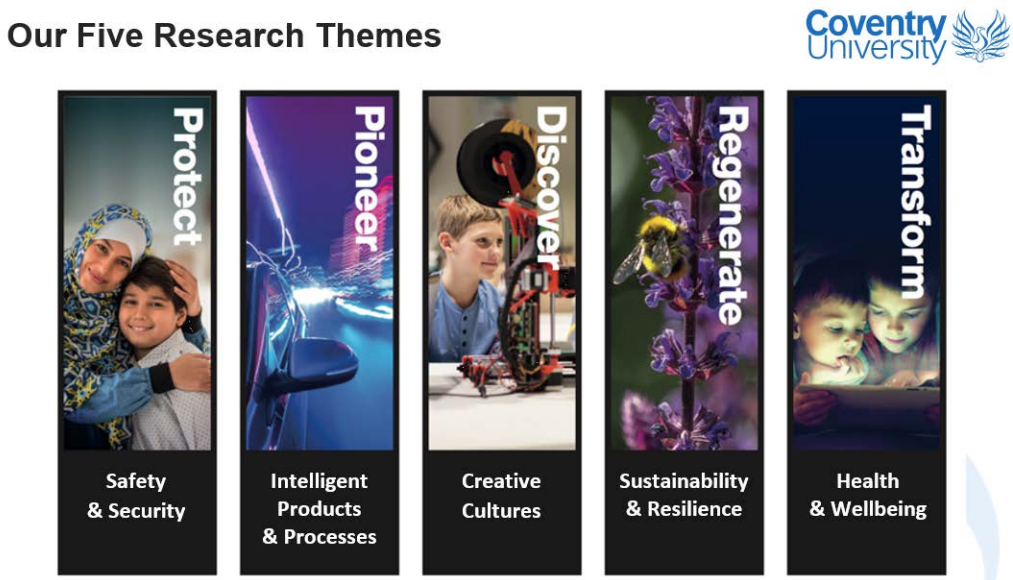
具体的には、コベントリー大学の強みであるエンジニアリング（自動車関連）、IT（サイバーセキュリティ）、人文学、データ科学、看護・医療分野、ビジネススクールなどが該当し、これらの分野を横断する形で５つの研究センターを設置している。従来の学部の枠を超えて、上記に挙げた５つの分野に既存学部のリソースを再編している。

英国政府系の補助金（英国内に数箇所ある研究認証機関が判定）だけでなく、海外政府・機関からの資金調達も積極的に目指す。英国政府からの補助金、海外政府・機関からの資金調達を得るために、国内外の大学ランキングや英国政府における評価制度（TEF や REF）のスコアを重視している。

コベントリー大学の研究戦略の特徴

- 最適の相手と組む（コベントリー大学側も最適な分野や研究者を示す）
- 大学のレピュテーション向上に活用する
- PhD プログラムについて、特に海外の大学との共同学位を目指すことで、学生の履歴書を豊かにする
- Global Challenges Research Fund (GCRF) の資金獲得狙う
- TNE(Transnational Education)の活用
- ブレグジット（英国の EU 離脱）の克服

現在、最適なパートナー相手として EU、オーストラリア、南アフリカ、米国と考えているが、今後は世界中のトップ大学との提携を考えており、日本の大学もパートナー候補として視野に入れている。



コベントリー大学の特色のある研究紹介

HORIBA-MIRA Vehicle Engineering Project

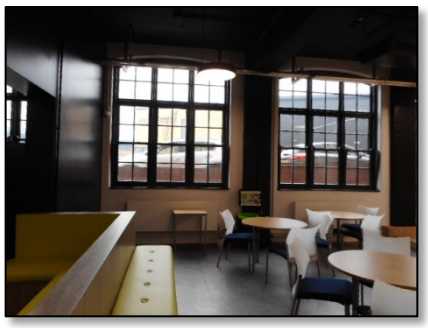
コベントリー大学が、Horiba Mira 社（株式会社堀場製作所の英国におけるグループ会社の一つ）と共同で取り組んでいるプログラム。同社は、企業や大学と連携し、MIRA Technology Institute という研究施設を設立し、産学連携による開発を進めている。コベントリー大学の他に、North Warwickshire & Hinckley College、Loughborough University、University of Leicester と連携している。

コベントリー大学は、Cyber Security や Vehicle Dynamics、Simulation of ADAS/CAVs（事故などの可能性を事前に検知し回避するシステム等）において同社と共同研究を実施している。

このプログラムには博士課程学生が多く参加しており、Horiba Mira 社と同大学の両方で研究に関与している。

キャンパス見学について

コベントリー大学のキャンパスは、広い土地にレンガ壁の建物が点在している。今回のキャンパス見学では世界に３施設といわれる、VR (Virtual Reality) 技術を駆使したシミュレーションセンターが特筆された。現場事務所が設置され、大きな画面に講義現場が映し出され、歩行とともに画面が動いていく。あるシナリオに基づきさまざまな事象をシミュレーションで体験することができる。この内容はすべてビデオ撮影されていて、その場での指導やフィードバックを行うことができるというものであった。



各学部においても、実務を意識した施設が充実していた。看護学部では、入院病床をイメージした施設、在宅ケアをシミュレーションする施設で実習が行われている。医学部にも高機能な人型シミュレーターにより、診断・治療のシミュレーションをすることができる。医療系の学習では実地に入る前にシミュレーションによる教育が必要であり、日本でも取り入れられているが、コベントリー大学の施設はとても充実しており、スタッフにより有効に運用されていた。金融マネジメントの学部では、トレーディングをイメージした部屋などもあり、全体的に実学的な学習が充実しているという印象を受けた。

国際連携業務について

Centre for Global Engagement (Interim Co-director Albina Szeles)
Student Mobility: Oncoming and Outgoing (Ms Jessica Bird)
Summer Schools (Ms Shawnna Pomeroy)
Virtual mobility (Ms Ruth O'Brien)

ブレア政権時には、海外からの「留学生受入」が大きな目標であったが、現在の課題は「海外に行きたがらない英国生まれの学生を海外に送り出す」が基本目標となっている。

Global Engagement チームでも各種のプログラムを提供しているが、海外に学生を送り出し、旅行のような短期滞在ではわからない、本物の外国文化に触れること、若い年齢から海外の同世代の学生などと交わって国際的な人的ネットワークを構築すること、そのための機会や知識の提供を重視している。

例えば、外国語については、大学生だけでなく、地元の住民にもプログラムが提供されており、年間約 3,000 人が受講している。スペイン語のような欧州言語と中国語が人気だが、日本語も人気言語の一つで、日本の大学との間でオンラインコースの開発をしたいと考えている。

グローバル人材としては、「ソフトスキルズ」も必要で、それらを獲得するためのプログラムも提供している。外国語学習以外にもコミュニケーションスキル、プレゼンテーションスキル、IT スキルなど非アカデミックな技術を学ぶプログラムを大学独自で提供している。

また、海外から受入れた留学生の支援として、企業（海外企業を含む）でのインターンシップに注力している。英国で留学生が就職しようとした場合、語学力などが壁になるために、実際に留学生を企業に預け、労働経験を積むなど、学生の CV（履歴書）を豊かにする工夫を行っている。

サマープログラムでは、コベントリー大学の複数あるキャンパスから学生が参加するだけでなく、派遣する現地大学とは別に、他大学も参加できる仕組みを持つ。2 週間程度の期間（プログラム期間の短縮化がトレンド）で実施できれば単位 (Credit) を発行している。

Centre for Global Engagement について

1) 部署の概要

英国政府の新たな留学生政策に則り、英国への留学生の受入だけでなく、英国人学生に様々な外国（海外）経験を提供することをミッションとしている。

2) Global Leaders Programme の概要

学部生向け、大学院生向けのプログラムを提供しており、海外研修も行っている。学部向けのプログラムでは、後述する Linguae Mundi Programme で提供される 20 言語から 1 言語を選択して学修することや、国際機関や海外訪問を通じて、文化的な違いを超えたビジネスの方法論を学ぶ。大学院生向けでは、グローバルな場面で、コーチングやメンタリングを通じて、他人のマネージメントの体験と自己のリーダーシップを構築する機会を提供している。海外研修では、実際の海外で身につけたスキルがどのように機能するかを学ぶ機会を提供する。また、グローバルな場面で実際に知り合った人々とのネットワーク作りの機会としても活用している。

3) Linguae Mundi Programme の概要と特色について

コベントリー大学が提供する外国語プログラム。受講生は学生、教職員に限らず、卒業生や一般市民も受講できる。年間約 3,000 のコースが設けられている。2019 年時点で、フランス語、スペイン語、イタリア語、アラビア語、中国語など約 30 言語を提供している（英語コースもあるが外国人向けと思われる）。日本語も人気があり、オンラインで外国人向けの日本語プログラムを提供する日本の大学を探している。

4) Work Experience for Global Employability について、留学生向けのトレーニングの概要

一般的に、実際の就職活動では、英国人の学生に比べて留学生は、面接や履歴書、文化的な違いなどで不利な状況にある。そこで、大学から企業等に学生を預け、企業での研修を通して就職で役立つ「実践的なスキルの取得」を主眼としたプログラムを提供している。プログラムの中心として、様々な産業・企業における短期・長期のインターンシッププログラムが行われている。研修先は英国内に留まらず海外も含む。一般的なプログラムでは、企業での研修（労働経験）に加え、数日（国内企業）から 1 週間程度（海外企業）の文化プログラム（国内外の文化的・歴史的に価値のある場所の訪問など）と組み合わせた形で実施している。

COIL（Collaborative Online International Learning）について

Online International learning の枠組みとして COIL (Collaborative Online International Learning) を 5 年前から導入しており、カリキュラムに組み込まれる形で、多数のプログラムが同システムを使用して展開されている。

47 ヶ国 97 機関とパートナーシップを構築しており、昨年は 3,060 名のコベントリー大学の学生が同システムを使用した授業に参加しており、89 のプロジェクトが実行された。

COIL そのものが米国発祥の教育システムであるため、現状米国の大学とのパートナーシップが多い状況になっているが、コベントリー大学としては、今後さらにネットワークを拡大していきたいと考えている。

特に日本の大学とのパートナーシップはない状況のため構築に積極的である。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

SDGs への取り組み：今回の訪問では、Sustainable Development Goals について、コベントリー大学だけでなく、全ての大学で言及があった。日本の大学でも、研究面では既に多くの取組がなされているが、大学の運営目標として SDGs が明確に組み込まれていた。本年より、Times Higher Education の新しい大学ランキングとして、Impact Ranking が開始されており、大学の SDGs 対応が大学評価として位置づけられ始めている。今回の英国大学訪問では、”equality, diversity and inclusion”が中心テーマに据えられているが、これも、SDGs の第 4 ゴール（質の高い教育をみんなに）、第 5 ゴール（性の平等）、第 10 ゴール（不平等の解消）といった目標に合致したものである。教授や管理職（職員）ポストの性別の均衡や、留学生への支援は、単に業務で行うものではなく、大学評価に繋がるより幅広い文脈から理解する必要がある。

TNE (Transnational National Education) に関連して、関西大学でも導入されている COIL (Collaborative Online International Learning) が活用されており、興味深く聞いた。ディスタンスラーニングといえば、Black Board など、講義を撮影、編集したものを提供するイメージであったが、現況は、二地点以上を COIL のようなシステムで繋ぎ、パワーポイントなどの教材を画面上でシェアする以外は、通常の講義と変わらないものが主流となっている。COIL であれば、プログラムを作りこむ手間が少なく、気軽に取り組めるという利点がある。

5. 報告者所感

今回の研修を通じて、「遠い国」と感じていた英国が、数年先の日本の姿というイメージで捉えられるようになった。前提となっている「英国の状況」が日本のそれと酷似しており、日本を先取り（5～10 年）しているとも考えられなくもない。日本より「少し先」を歩いている英国の状況を知ることは、今後の日本の大学の課題を考える上で有益である。

4 大学のうち、ブリストル大学とノッティンガム大学は研究大学（英国でもトップ大学の 2 つ）、デモントフォート大学とコベントリー大学は教育力に定評のある大学というイメージで研修に臨んだが、英国の将来像という点では共通認識を持っていることがわかった。その認識をもとに、研究大学寄り、教育大学寄りという「解釈の違い」があるだけだった。4 つの大学での違いよりも、4 つの大学の「共通点」をきちんと理解しておく必要がある。具体的には、留学生政策の変更（受入→受入＋派遣）、学生の就職サポート（ソフトスキルズへの着目と、学生が CV に記入できる内容の充実）、SDGs を前提とした大学の経営方針、TNE（Transnational Education）の興隆（新しい教育・研究交流）、大学職員の高度化（専門性に立脚した企画・戦略の立案）などである。これらの共通点から英国の大学が日本の大学をパートナー（になるかもしれない）と見始めている点を理解したい。

今回の訪問では、望外の歓待を受け、多くの情報を得ることができたが、反対に、日本の大学や大学システムに対する英国側の理解が少なかったように思う。視察の枠を超え、今後の関係構築の機会（キッカケ）と考えた場合、①日本の大学システム ②参加大学の研究・教育プロファイル（特徴のあるポイントを 3 つくらい）を英語で相手に伝えることも重要ではないかと感じた。

（報告担当：飯島、島田、地村、中原、原）

第 10 回英国大学視察訪問　参加者リスト

	参加者リスト（所属機関アルファベット順、敬称略）		
1	岡部 赳大	北海道大学	欧州ヘルシンキオフィス　副所長
2	巽 貞信	北海道大学	国際部国際連携課　係長
3	地村 藍	国際基督教大学	サービス・ラーニング・センター　行政事務職
4	髙橋 未来	一般社団法人国立大学協会	企画部　主幹付
5	飯島 直樹	関西大学	国際教育グループ　受入留学生支援チーム　住居および学生生活コーディネーター
6	島田 貴史	慶應義塾大学	グローバル本部　主務
7	楠元 景子	名古屋大学	国際教育交流センター　特任講師
8	中原 康博	立命館アジア太平洋大学	企画課　課長
9	原 義徳	東海大学	戦略プロジェクト室　室長
10	寺沢 三津子	筑波大学	教育推進部スーパーグローバル大学事業推進室　係長